

身体で“みる”

— 視覚中心社会における新しいスーパーマーケット —

21919026 田崎 真理菜  
指導教員 宮 晶子 教授

視覚 見る 感じる  
五感 身体尺度/モノ尺度 対関係

1. 背景と目的

現代社会において、技術の発達により、デジタル化が日々進んでいる。また、遮音性能の向上により、音の無い気密化された建築物が増加している。それにより、視覚中心の社会が加速し、人々が視覚だけで情報を得ることができる社会になってきている。今、人々は視覚頼りの生活をし、視覚以外の機能の使用頻度が低下している。これらが人々に孤独感を抱かせ、充実感や豊かさの喪失を生んでいると考えられる。

本制作では、人々が視覚を疑い、他の感覚を使って空間を見るようになる空間の提案を目指す。この提案により、もっと豊かに世界が“みえる”ようになるのではないか。世界にあるモノは目で見えるモノだけではないはずだ。

2. 目の見える人の空間の捉え方

2-1. 二次元化

目の見える人は、空間でまず出発点と目的地を繋ぐ「道」を捉える。更に、視覚は三次元を二次元化するため、平面として捉える。特に富士山や月のように遠くにあたり、巨大であったりするモノに対して立体感を失わせ、平面的に捉える。

一方、見えない人は、空間を俯瞰的で三次元的なイメージで捉え、自分自身で空間に線を引いて、道を作っていくイメージを持つ。見える人は、道の先まで一瞬にして見通すことができるため、空間を「道」無しで捉えることは難しく、「道」に縛られてしまう。道だけを特別視していると言える。



図1 見える人が見た大岡山※

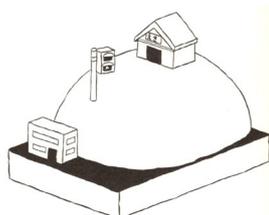


図2 見えない人が見た大岡山※



図3 見える人が見た富士山※



図4 見えない人が見た富士山※

2-2. 対象物の価値化

目の見える人は、ある1つの面を「正面」などと捉えるように、面や空間に対して価値のヒエラルキーを無意識に持つ。一点の視点を持つため、すべての面を対等に見ることが難しい。面や空間に対して表裏をつける。

3. 「見る」から“みる”へ

「見る」という行為は、文字通りだと「目」だけの行為だが、本来は「目」だけで行われているのではない。目の見えない人は点字を手で触って、本を読む。この時、脳の視覚を司る部分を使って本を読んでいる。また、目の見えない人は、足をも使って自分が居る空間を“みて”いる。目が見える人も、「目」以外の身体機能を使って、“みる”ことはできるのではないだろうか。

4. 身体で“みる”空間

身体で“みる”空間は、身体尺度/モノ尺度、上下の対関係、変容性、双極性/表裏、空間の中の「人」の5つの要素で構成される。以下に説明する。

4-1. 身体尺度 / モノ尺度

私たちの多くは、自分の周りのモノの大きさを自分自身で感じることなく、無意識的に視覚と経験だけで、決定してしまっている。大きさを規定する尺度に囚われず、自分の身体やモノ自身の大きさ、すなわちそれ自身の尺度を使って世界を“みる”ことによって、空間を身体で感じることができると考える。

4-2. 上下の対関係\* \*荒川修作による

世の中の出来事は身体を中心として、基本的に非対称性で成り立っている。その非対称性で構成される社会にあえて、対称性、すなわち対関係を創造する。特に上下の非対称性に着目し、対関係を創造することにより、視覚のパースペクティブや経験が崩れ、歪む。重力方向以外の軸が喪失し、身体で感じる必要がある空間になると考えられる。

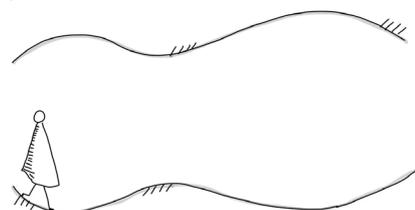


図5 対関係の断面イメージ

### 4-3. 変容性

近年、閉ざされた気密性の高い空間が増加している。しかし、外部と繋がり、季節や時間、天候によって空間自体が変化するような、日常的に様々な環境に囲まれて過ごすことによって、空間を身体で感じることができると考えられる。

また、空間にいる人の歩く速度も変化するようにすることで、更に感じ方が変わる空間になる。

### 4-4. 双極性 / 表裏

磁石のN極とS極、電気のとーのように、二つのモノは同一であるのに、その相互を比較すると正反対な関係である。この関係を空間に取り入れると、表裏の区別が難しくなり、空間の、モノの価値化の経験を崩すことができると考えられる。

### 4-5. 空間の中の「人」

現在、多くの人々がどこへ行くにもイヤフォンをしたり、スマホを触ったりしている。自分だけを認識して空間に滞在している。つまり、他の人を空間に存在する「人」として認識していない。しかし、目でその人を捉え認識するだけでなく、他の「人」を体温や気配などで感じたり、コミュニケーションをとったりすることで、空間に無くてはならない空間の要素として、他の「人」を感じることができれば、視覚だけでは見えない空間になると考えられる。

## 5. 設計提案

### 5-1. プログラム

視覚中心社会になる近代以前からある建築物、空間において、現在最も視覚偏重に変化している1つとして、「市場」からの「スーパーマーケット」の変化が挙げられる。スーパーマーケットは社会に合わせて、利便性や視覚における見やすさだけを追求した空間になってしまっている。

日常的に訪れるスーパーマーケットを、五感を、身体を目一杯使って感じる空間にすることで、視覚だけが重視されがちな社会に対して疑問を抱いたり、他の感覚を使ったりすることに繋がるのではないかと。

### 5-2. 敷地

現在、実際にスーパーマーケットが建つ敷地から選定する。今後、普遍的な、現在スーパーマーケットが建つどこの敷地にも適用できることを目指すため、この提案では住宅街の中にあり、北側は車通りが多い大通り、バス停に面し、南側には公園がある場所を敷地とする。

### 5-3. 構成と手法

従来のスーパーマーケットとは異なり、中心に出口、周りのいくつかの入口をもつ。自分の好きな入口から入り、好きなように進む。買い物を終えて出口から出ると、

自分が少し前までいた空間の上部を歩くことになる。これは内外の双極性/表裏の関係を示す。

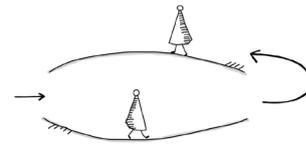


図6 双極性/表裏

外部環境を根拠として商品を配置する。比較的涼しい北側は、冷たい商品を、南側は暖かい商品を置く。(図7)更に膜構造と開口部(図8)によって、外部環境を内部に多く取り込むことで、空間に変容性を生む。

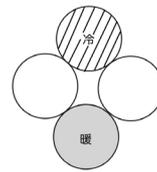


図7 全体配置ダイアグラム

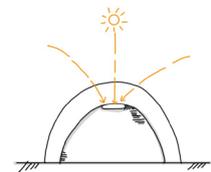


図8 外部環境の取り込み

明らかな対関係を創り出すため、上下に対関係をもつ曲面を配置する。棚により左右の対関係も創る。床が曲面であることで、人々の歩く速度の変化も促す。人々の歩く速度が不規則になり、人自身も変化することで人が空間の要素になる。

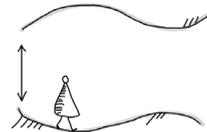


図9 上下の対関係断面



図10 左右の対関係平面

上下の曲面に加えて、壁や棚も角を持たせない。角が無いと、視覚での予測もしづらい。また、柱や床などの空間を創る要素が区別のつかないようにする。角と区別を無くすことで、対象物の価値化を排除する。



図11 角の有無による見え方

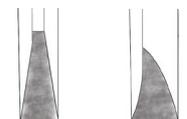


図12 曲がり角と曲がり

商品のスケールからも内部空間を決定する。人のスケールに合わせすぎないことで、無意識に身体を使い、様々な要素を身体で“みる”ことがしやすくなる。

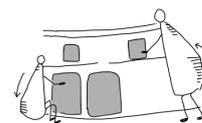


図13 身体を使う

### 主要参考文献

※伊藤亜紗：『目の見えない人は世界をどう見ているのか』、光文社新書、2015/4/20。

・荒川修作+マドリン・ギンズ、河本英夫訳：『建築する身体一人間を超えていくために』、春秋社、2008/4/1。